日本コミュニケーション障害学会
Japanese Association of Communication Disorders

第46回 日本コミュニケーション障害学会 学術講演会

予稿集

The 46th Meeting of Japanese Association of Communication Disorders

テーマ

知りたいことを知る・知るべきことを知る

会期 2020年5月30日(土)・31日(日)

会場 東北大学川内北キャンパス

会長 川﨑 聡大 東北大学大学院教育学研究科

第46回

日本コミュニケーション障害学会 学術講演会

予稿集

The 46th Meeting of Japanese Association of Communication Disorders

会　期：2020年5月30日㈯・31日㈰

会　場：東北大学川内北キャンパス

会　長：川﨑　聡大
東北大学大学院教育学研究科

主　催：日本コミュニケーション障害学会

共　催：東北大学大学院教育学研究科

後　援：宮城県教育委員会
一般社団法人 日本公認心理師協会
学校心理士会宮城県支部
宮城県臨床心理士会
宮城県言語聴覚士会
臨床発達心理士会東北支部

第46回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
開催にあたり

第46回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
会 長　**川﨑 聡大**

第46回日本コミュニケーション障害学会学術講演会は、2020年5月30日（土）～31日（日）に、宮城県仙台市青葉区の東北大学川内北キャンパスで開催いたします。多くの皆様にお越しいただきたくご挨拶申し上げます。

今回の学会を計画するにあたり、基本方針を事務局メンバーと確認しました。まず基本方針として、「我々が見せたいもの」ではなく「参加者が知りたい、知っておきたいと感じる内容」を準備しよう、特に若手の現場の先生が心の底から「行ってみたい」「参加してみたい」と思っていただける内容にしよう、と話し合いました。

この観点に則ってまず、基調講演、特別講演、教育講演、シンポジウムを構成しました。我々の領域が進むべき方向性に有意義な示唆を与えていただき、それを共に考える機会となる企画を準備しました。まず基調講演には長田乾先生（横浜総合病院）をお迎えして「認知症を支援する：認知機能を支えるコミュニケーション」と題してご講演をいただきます。長田先生は秋田県立脳血管研究センターでのご活躍をはじめ、今もなお認知症の臨床と研究の最先端に位置する先生です。長田先生のお話は常にご自身の臨床に裏付けられた豊富かつ最新のデータに基づいているだけでなく、聞く人に応じた活きた知識となるご講演をいただけると確信しています。特別講演には本郷一夫先生（AFL 発達支援研究所）に「発達を支援するとはどのようなことか」と題してお願いをしています。本郷先生は発達心理学を専門とされ「気になるこどもの発達支援」に関して数多くの業績を積み重ねてこられています。特にミクロな視点に陥りやすい発達支援においてチームを意識し、何より長期的展望を持った発達支援の在り方についてご示唆いただけると確信しています。次に教育講演は二つ準備させていただきました。まず自閉症スペクトラム障害（ASD）に関する脳科学で世界最先端を走る渡部喬光先生（東京大学国際高等研究所）から ASD の脳科学について最新の知見を交えてご講演をいただき我々の ASD の実態理解を一歩進めていただくきっかけとしたいと思います。さらに教育講演2 川島隆太先生（東北大学加齢医学研究所）から生活習慣と脳に関するご講演をいただきます。川島先生のご実績については説明不要かと存じます。生活習慣と脳との関連についてのご講演から参加者が「習慣」について考える機会になると思います。シンポジウムではコミュニケーション障害の領域での大きなトピックスでありながら、様々な考え方や理解がなされている「ナラティブ」と「学習言語の支援」を取りあげ参加者の皆様と考える契機としたいと思います。

次に「現場と研究の双方からの還流」です。研究知見のプライオリティーは重要ですが、それに固執するあまり研究の本質と本文を見失っていないか常に顧みる必要があります。研究は医療・教育・福祉といった様々な現場に還元できてこそ意味を成すと我々は考えます。研究自体がゴールでもなければ、自己満足のためでも宣伝の手段でももちろんありません。また現場から研究への還流によって研究の更なる進展が望めます。学会の役割として先端の研究知見と現場の相互還流の要、橋渡し役を担えることができないかと考えました。この観点を具現化するために今回、多くのモーニングセミナーとランチョンセミナーを企画しました。モーニングセミナーでは高次脳機能から学習障害、流暢性障害に関するいまさら聞けない基本的事項から実践手技まで、丁寧にそれぞれの領域の第一人者の先生からご講義を賜ります。ランチョンセミナーでは（企画によりますが）体験を取り入れワークショップに近い形で実施し、「近寄りがたい研究知見」をすぐに活用できる知識として皆様に知っていただく機会としたいと考えています。大井学先生（金沢大学）にお願いしております「子どもの語用能力を測る：CCC-2子どものコミュニケーション・チェックリスト日本版の模擬実施と「ことばのつかいかたテスト」の紹介」をはじめとして、保護者支援から聴覚活用、ひいては個別指導計画への検査結果の活かし方に至るまで多くの企画の準備調整を進めています。

最後に「原点回帰 ―ディスカッションの重視―」です。Nature に多くの論文を載せた南方熊楠は「権威に媚び明らかな間違いを不問にしてまで阿諛追従する者など日本には居ない」言葉を残しています。ディスカッションは自分を守る手段はなく、真摯に自分の歩みである結果と向き合う手段であり、その過程なくして研究知見を高めることは出来ないと考えます。著名な先生の実践やスポットが当たっている実践が必ず正しいとも限りません。この学会が、そういった日々感じる疑問を素直にぶつけたり、児・者に資する多くの実践にスポットを当てることが出来るディスカッションの場でありたいと思います。これを実現すべく、一般の発表とは別に「実践研究枠」を設定します。演題数は限られますが、一般演題に比べて発表時間やディスカッションの時間に余裕を持たせたいと考えています。

日本コミュニケーション障害学会は今回で46回を数える歴史を有しています。伝統を尊重する最も具体的な行動は新たに伝統を創造することだと考えます。今回の新たな取り組みがこの学会の新たな一歩となることを小生、藤原副実行委員長、松﨑事務局長を始め実行委員一同の総意として切に願っています。

新緑の仙台にぜひ足を運んでください。皆さん、一緒に勉強しましょう。

第46回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
開催にあたり

日本コミュニケーション障害学会
理事長　**吉畑 博代**

2020年の第46回日本コミュニケーション障害学会学術講演会は、宮城県仙台市にある東北大学川内キャンパスで開催することになりました。あの東日本大震災から9年が経ち、学術講演会を東北第一の都市、仙台で開催できることは私たちにとっても感慨深いものがあります。震災を機に、災害に対して本学会ができる支援とは何かを考え、行動することが始まりました。その後も多くの災害が起き、私たちの取り組みは続いています。このたび、東北の地に足を運び、その復興を目の当たりにすることは、私たちにとって貴重な経験になると思います。

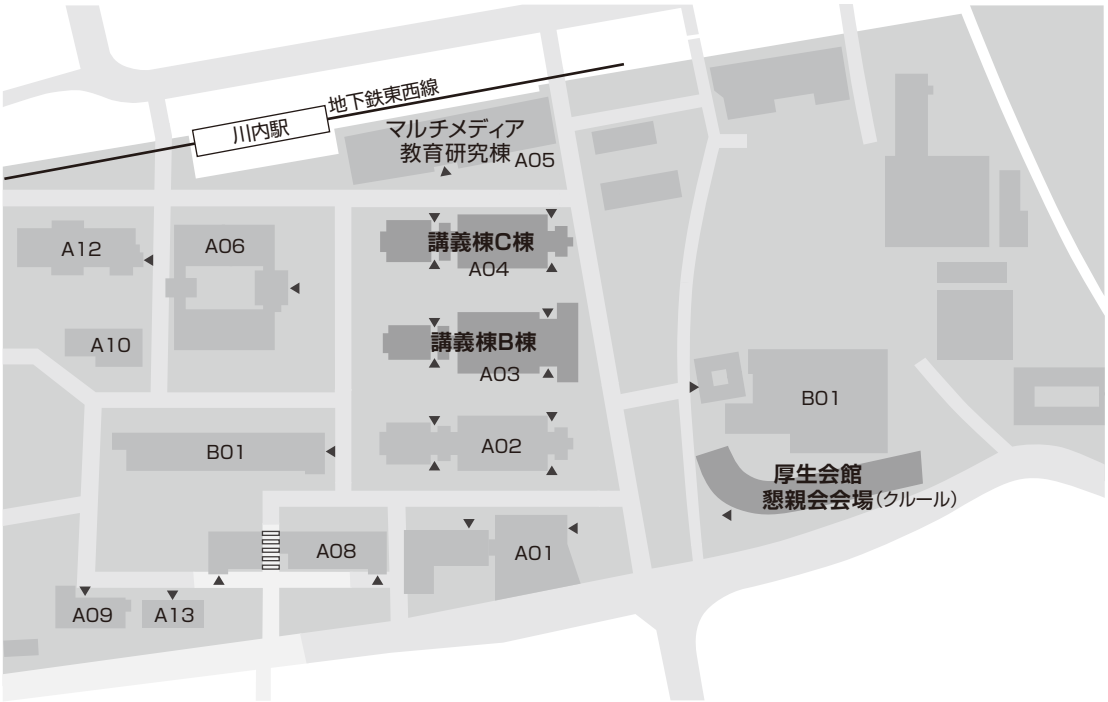
さて、今回の学術講演会の会長は、川﨑聡大先生がお引き受けくださいました。川﨑先生の意気込みがプログラムの端々から強く伝わってきます。テーマの「知りたいことを知る・知るべきことを知る」は、臨床や研究を業とする専門職には至極当たり前のことながら、はたしてそういう機会を日頃持ち得ているか、あらためて考えさせられる真正面からの問いかけのような気がします。基調講演、特別講演、教育講演はどれも興味深いタイトルですし、シンポジウムやセミナーも非常に充実しています。参加者の満足度が高くなることは間違いないでしょう。

会場の東北大学川内キャンパスは、戦国武将・伊達政宗の居城であった仙台城（青葉城）の跡地にも近いようです。学会日程の前後やお昼休みに訪ねてみられてはどうでしょうか。本丸跡からは仙台市内を流れる広瀬川の流れが眼下に一望でき、お天気がよければ太平洋も見えるとのことです。季節的にも新緑の青葉があふれていることでしょう。また、仙台にはおいしいものがたくさんあると聞いています。多くの会員、非会員にご参加いただき、にぎやかで楽しく、そして「知」が増える学術講演会であることを期待しています。活発な討論を行い、今後の臨床や研究の糧になることを願います。

本学術講演会の開催に向けて、会長の川﨑先生、事務局長の松﨑泰先生をはじめとする多くの関係者の皆様が2年以上前から準備を進めてくださいました。ご多忙な中充実した学術講演会を目指して、きめ細やかにご準備くださったことに心よりお礼申し上げます。

交通案内

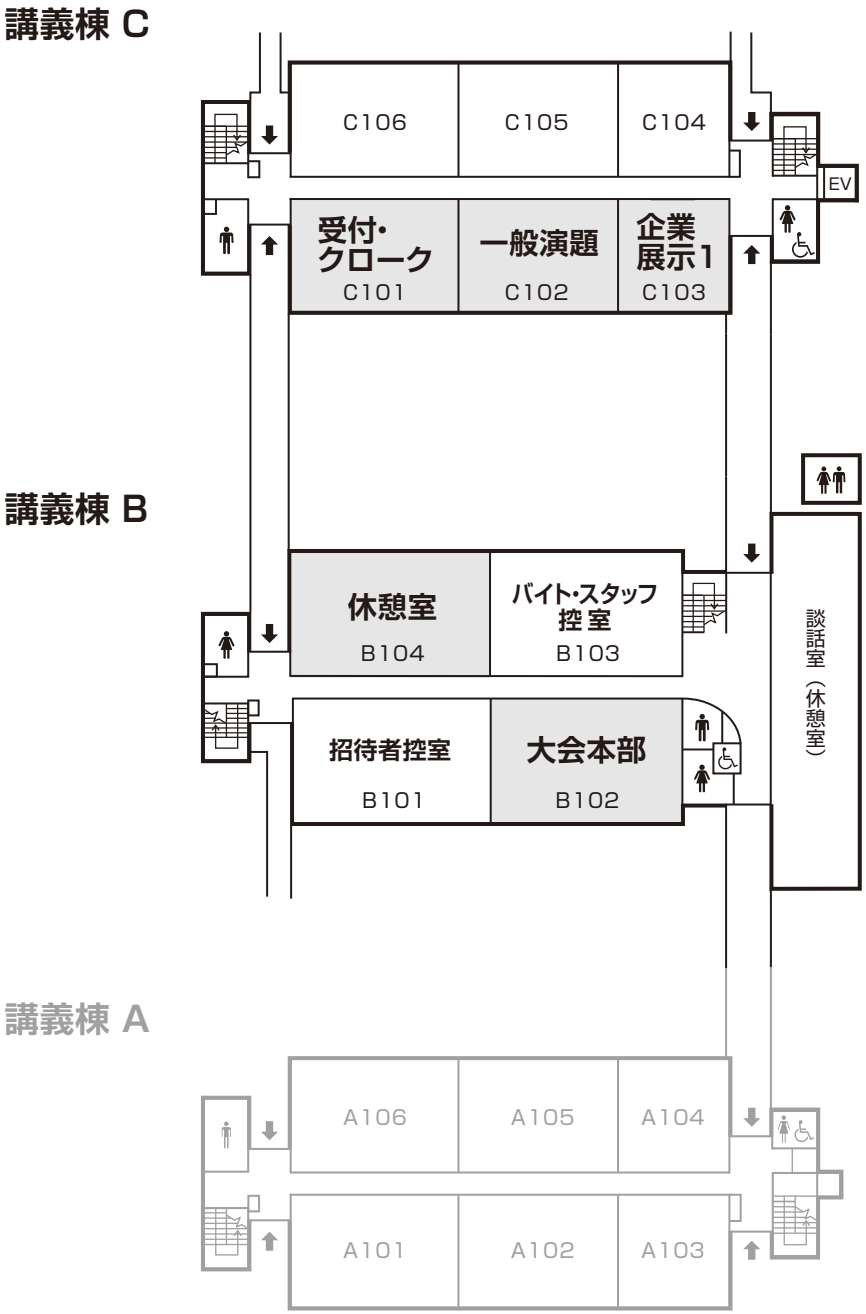
東北大学（川内北キャンパス）



※川内駅（仙台市地下鉄東西線）がキャンパスに直結しています。

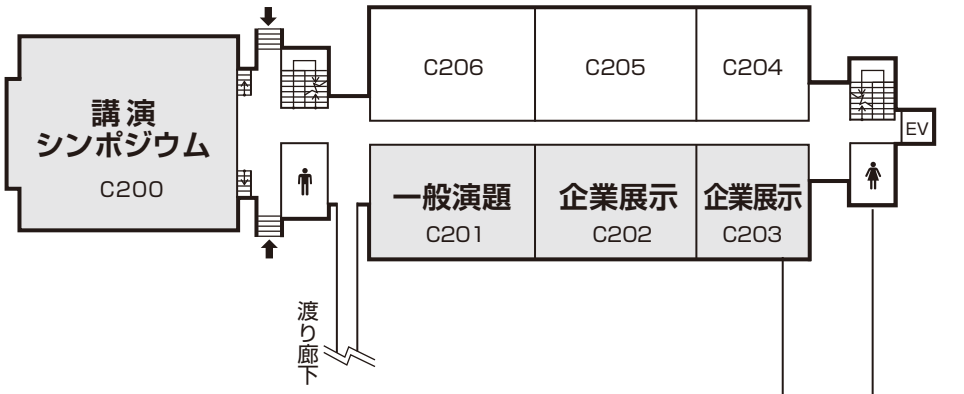
会場案内

1F

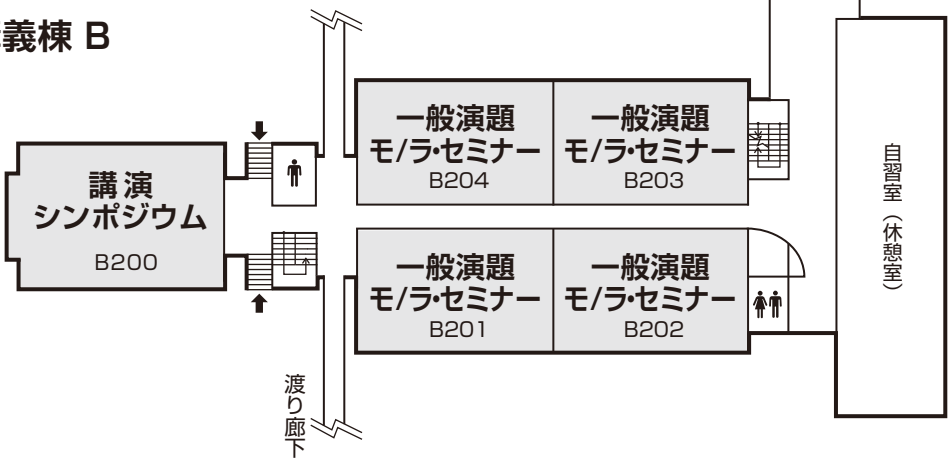

講義棟 C
C106
C105
C104
EV
受付・クローク
C101
一般演題
C102
企業展示1
C103
講義棟 B
休憩室
B104
バイト・スタッフ控室
B103
談話室（休憩室）
招待者控室
B101
大会本部
B102
講義棟 A
A106
A105
A104
A101
A102
A103

2F

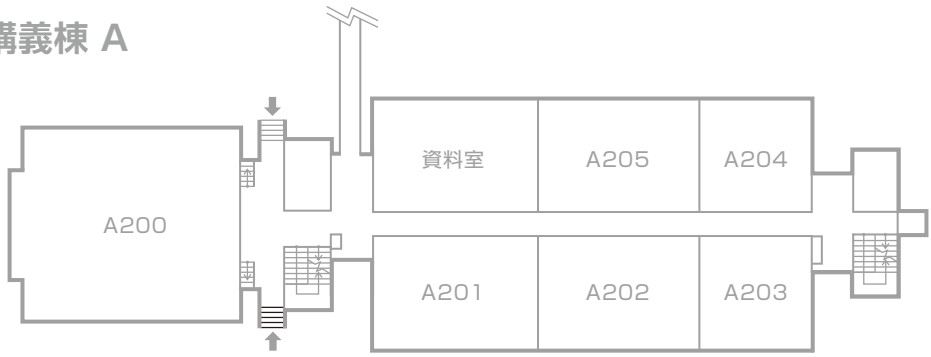
講義棟 C



講義棟 B



講義棟 A



ご　案　内

以下の内容は現地開催の場合です。新型コロナウイルス感染症対策で WEB 開催となった場合は細部に変更がある可能性が高いです。
大会 WEB サイトや SNS、発表者向けのメールをご確認ください。

■参加受付

1. 5月30日（土）は8時20分、31日（日）は8時より行います。
2. 「参加受付」は、東北大学川内北キャンパス C 棟1階に設けてあります。
3. 参加費および懇親会費は次の通りです。

会　　員	10,000円（当日参加11,000円）
非 会 員	11,000円（当日参加12,000円、予稿集は含みません）
学　　生	5,000円（当日参加12,000円、予稿集は含みません）※
懇親会費	5,000円

※学生証を呈示してください。

4. 予稿集は、受付にて1冊1,000円で販売いたします。
5. 大会会場（東北大学）は国立情報学研究所（NII）による eduroam JP に対応しております。所属機関において、eduroam アカウントをお持ちの方はそのままインターネットにアクセス可能です。

■進　　行

【口頭発表】

1. 座長の方へ

1）開始予定の30分前までに参加受付フロア内の「講師・司会・座長受付」にて受付をお済ませください。

2）開始予定の10分前には、次座長席にお着きください。

3）1演題の発表は7分、質疑応答は3分です。

4）質疑応答では、発言者の所属・氏名を確認してください。

2. 演者の方へ

（1）発表受付（スライド受付）について

①東北大学川内北キャンパス（C 棟）1階に「PC 受付」がございます。
「参加受付」の後、各セッション開始30分前までに「PC 受付」をお済ませください。
但し、朝一番のセッションで発表される方は、準備の都合上、「PC 受付」を先に済ませてから「参加受付」を行なってください。

②2日目に発表の方も1日目に受付可能です。

(2) 発表用データについて

①発表は会場設置のPC（Windowsのみ）を使用していただきます。

②用意しているコンピュータのOSとアプリケーションは以下の通りです。
OS：Windows10
プレゼンテーションソフト：Microsoft PowerPoint
事前にご自身のPCにて必ず動作チェックを行なってください。

③演者の方は発表データをUSBメモリーに保存し、「PC受付」へお持ちください。
USBメモリーは、必ず事前にウィルスチェックを済ませてからご持参ください。
※その他のメディアは受け付けられません。ご注意ください。

④動画・音声等を使用される場合は、必ず「動画」「音声」として挿入してください。元のデータから「リンク」させることはトラブルの原因となりますので避けてください。

⑤ファイルの取り間違えを防ぐために、ファイル名を［演題番号－発表者の姓］に統一させていただきます（英数字は半角）。
例）演題番号1B-07、北里太郎さんの場合は ［1B-07北里］とします。

⑥文字化けを防ぐために、下記のOS標準フォントをお使いください。
日本語：MSゴシック、MSPゴシック、MS明朝、MSP明朝
英　語：Arial, Arial Black, Century, Century Gothic, Times New Roman

⑦音声記号のフォントの多くは「特殊記号」ですので、PCが異なると文字化けの可能性が高くなります。お手数ですが音声記号は画像として貼り付けてください。

⑧発表データは作成に使用したPC以外のPCにて動作確認をしてからお持ちください。

(3) 動作確認について

①「PC受付」でUSBを提出される際に、受付にあるPCにて動作確認を行なってください。

②発表で動画・音声を再生する場合は、必ず「PC受付」にてその旨お知らせください。

③発表データ（PowerPoint）は、いったん受付用PCにコピーし、動作確認後に各会場のPCのデスクトップにコピーします（コピーした発表用データは、学会終了後、事務局が責任をもって破棄します）。

(4) 発表について

①PCの操作は演者ご自身でお願いします。操作支援・補助が必要な場合は「PC受付」でご相談ください。

②発表時間は7分、質疑応答は3分です。
発表終了1分前と終了時に合図をいたします。終了時間を厳守してください。

3. 質疑応答

1）質疑応答は1演題につき3分です。

2）質疑応答は座長の指示に従ってください。

3）発言者は最初に所属・氏名を述べてください。

【学会誌用の抄録原稿】

発表者の方は、「コミュニケーション障害学」掲載用の抄録原稿を、以下の要領で提出してください。

（1）抄録テンプレート（Microsoft Word）を学術講演会ホームページからダウンロードしていただき、メールで件名「抄録原稿送付（演題番号）」とし、「添付ファイル」で事務局アドレス宛（acd46annual.meeting@sed.tohoku.ac.jp）にお送りください。
締め切りは5月27日（水）正午です。

（2）抄録は『コミュニケーション障害学』（2020年12月末刊行予定）に掲載する予定です。

■お知らせ

1. 企業展示と休憩および昼食

1）川内北キャンパス講義棟C棟教室にて企業展示を行います。

2）昼食は川内北キャンパス学生食堂や、仙台市内の飲食店をご利用ください。

3）川内北キャンパス生協には売店がございますが。また品物の数に限りがございますのでご了承ください。

4）昼食のごみは可能な限りお持ち帰りをお願いいたします。

2. 総　会

日本コミュニケーション障害学会総会が開催されます。是非、ご出席ください。

日　時：5月31日（日）13：00～14：00

会　場：川内北キャンパス講義棟 C棟 200教室

3. その他

拾得物・遺失物、学会本部に御用の方は総合受付にお越しください。

日　程　表

第1日目　5月30日㊏

	講義棟B棟 B200教室	講義棟C棟 C200教室	講義棟B棟 B204教室	講義棟B棟 B201教室
8:20	8:20～　**受付開始**（講義棟C棟 C101教室）			
9:00	9:00～9:20 **開会式** 9:20～10:50 **基調講演** **認知症を支援する：認知機能を支えるコミュニケーション** 長田　乾 司会：神谷 哲司			
10:00				
11:00	11:00～11:50 **実践発表1** 座長：吉畑 博代 濱田 豊彦	11:00～11:50 **実践発表2** 座長：片桐 正敏 石田　瞭		
12:00			12:00～12:50 **ランチョンセミナー1** 司会：荻布 優子 〈S-S法〉とは －重度難聴重複例への取り組みを振り返り－ 東川　健	12:00～12:50 **ランチョンセミナー2** 司会：藤原 加奈江 学齢期児童の言語機能評価の在り方 －個別指導計画や個別教育支援計画に活用するために－ 柴　玲子
13:00	13:00～14:45 **シンポジウム1** **学習言語を支援する** 司会：石坂 郁代 シンポジスト： 高橋 知音 加藤 哲則 松崎　泰 川崎 聡大 指定討論： 加藤 醇子			
14:00				
15:00		15:00～16:30 **教育講演1** **神経ネットワークダイナミクスからみるASD** 渡部 喬光 司会：川崎 聡大		
16:00				

	講義棟B棟 B203教室	講義棟B棟 B202教室	講義棟C棟 C102教室	講義棟C棟 C201教室
8:20	8:20～ **受付開始**（講義棟C棟 C101教室）			
9:00			9:20～10:40 **一般演題** 自閉症スペクトラム障害 1O-01～08 座長：大井　学 西野 将太	
10:00				
11:00			11:00～11:40 **一般演題** 乳幼児検査 1O-09～12 座長：松崎　泰	11:00～11:40 **一般演題** 検査・評価 1O-13～16 座長：野口 和人
12:00	12:00～12:50 **ランチョンセミナー3** 司会：高卓　輝 **学齢期児童の言語 APDとDead Region 聴力検査異常なしは本当に問題ないと言ってよいのか** 中川 雅文			
13:00		13:30～14:30 **ジョイントセミナー1** **日常生活のなかで食べる機能を認識する** 石田　暸	13:30～14:30 **一般演題** 症例・指導 1O-17～20 座長：藤野　博	13:30～14:20 **一般演題** 高次脳機能障害・症例 1O-21～25 座長：時田 春樹 古西 隆之
14:00				
15:00			15:00～16:00 **一般演題** 社会支援 1O-26～31 座長：田中 早苗	15:00～16:10 **一般演題** 聴覚・聴覚障害 1O-32～38 座長：加藤 哲則 下澤 真紀
16:00				

第2日目　5月31日(日)

	講義棟B棟 B200教室	講義棟C棟 C200教室	講義棟B棟 B204教室	講義棟B棟 B201教室
8:00	8:00～　受付開始（講義棟C棟 C101教室）			
9:00			8:30～9:20 モーニングセミナー1 司会：市川 智継 高次脳機能障害をみる視点 大槻 美佳	8:30～9:20 モーニングセミナー2 司会：小林 宏明 いまさら聞けない吃音臨床の基礎 川合 紀宗
10:00	9:30～11:00 特別講演 発達を支援するとはどのようなことか −発達アセスメントと支援の関係性− 本郷 一夫 司会：松好 伸一			
11:00				
12:00			12:00～12:50 ランチョンセミナー4 司会：片桐 正敏 子どもの語用能力を測る：CCC-2子どものコミュニケーション・チェックリスト日本版の模擬実施と「ことばのつかいかたテスト」の紹介 大井　学	12:00～12:50 ランチョンセミナー5 司会：宮崎 光明 発達障害のある子どもの親に対するペアレントトレーニング −スタートアップのための基礎講座− 井上 雅彦
13:00		13:00～14:00 総会／ 学会賞および研究助成授与式		
14:00	14:30～16:00 教育講演2 生活習慣と脳 川島 隆太 司会：松崎　泰	14:30～16:00 シンポジウム2 ナラティブを再考する 司会：藤野　博 シンポジスト： やまだ ようこ 若島 孔文 李　熙馥 指定討論： 大伴　潔		
15:00				
16:00	16:00～　閉会式			

	講義棟B棟 B203教室	講義棟B棟 B202教室	講義棟C棟 C102教室	講義棟C棟 C201教室
8:00	8:00～ **受付開始**（講義棟C棟 C101教室）			
9:00	8:30～9:20 **モーニングセミナー3** 司会：加藤 哲則 **学習障害の基礎から応用 －評価の視点と特性に合わせた支援－** 奥村 智人	9:30～10:30 **ジョイントセミナー2** **補聴器フィッティングのピットフォール** ～規定選択法と実耳測定、そして聴覚リハビリテーションの実際～ 中川 雅文	9:30～10:40 **一般演題** 言語発達・学習障害 2O-01～07 座長：原 惠子 樋口 一宗	9:30～10:40 **一般演題** 失語症 2O-08～14 座長：中村 光
10:00				
11:00			11:10～11:40 **一般演題** 構音障害 2O-15～17 座長：原 由紀	11:10～11:40 **一般演題** 青年期・支援 2O-18～20 座長：前田 駿太
12:00	12:00～12:50 **ランチョンセミナー6** 司会：松本 恵美 **家族・保護者支援のための背景理解** 神谷 哲司			
13:00				
14:00			14:30～15:50 **一般演題** 流暢性障害 2O-21～28 座長：川合 紀宗 宮本 昌子	
15:00				
16:00				

プログラム

基調講演　5月30日(土)　9：20～10：50　（講義棟 B 棟 B200教室）

司会：神谷 哲司（東北大学大学院教育学研究科）

認知症を支援する：認知機能を支えるコミュニケーション

長田 乾　横浜総合病院 臨床研究センター

特別講演　5月31日(日)　9：30～11：00　（講義棟 B 棟 B200教室）

司会：松好 伸一（石巻専修大学）

発達を支援するとはどのようなことか
―発達アセスメントと支援の関係性―

本郷 一夫　AFL 発達支援研究所 代表

教育講演1　5月30日(土)　15：00～16：30　（講義棟 C 棟 C200教室）

司会：川﨑 聡大（東北大学大学院教育学研究科）

神経ネットワークダイナミクスからみる ASD

渡部 喬光　東京大学国際高等研究所 ニューロインテリジェンス国際研究機構 准教授

教育講演2　5月31日(日)　14：30～16：00　（講義棟 B 棟 B200教室）

司会：松﨑 泰（東北大学加齢医学研究所）

生活習慣と脳

川島 隆太　東北大学加齢医学研究所 所長 教授

シンポジウム1　5月30日(土)　13：00～14：45　（講義棟 B 棟 B200教室）

司会：石坂 郁代（北里大学医療衛生部）

学習言語を支援する

S1-1　大学生の読み書き困難の評価と支援

信州大学学術研究院（教育学系）教授　高橋　知音

S1-2　学齢聴覚障害児の日本語読み能力と学習到達度

愛媛大学教育学部 教授　加藤　哲則

S1-3　生活習慣や学習環境と学習支援

東北大学加齢医学研究所 助教　松﨑　　泰

S1-4　教育評価の視点から読み書き困難の支援を再考する
―読み書き困難に関する研究の現状と課題―

東北大学大学院教育学研究科 准教授　川﨑　聡大

指定討論

日本ディスレクシア協会　加藤　醇子

シンポジウム2　5月31日(日)　14：30～16：00　（講義棟 C 棟 C200教室）

司会：藤野 博（東京学芸大学教職大学院）

ナラティブを再考する

S2-1　ものがたり（ナラティヴ）の生成力

京都大学 名誉教授、立命館大学 上席研究員　やまだようこ

S2-2　臨床におけるナラティブ

東北大学大学院教育学研究科 教授　若島　孔文

S2-3　自閉スペクトラム症児におけるナラティブの特徴とその支援

国立特別支援教育総合研究所 特任研究員　李　　熙馥

指定討論

東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター 教授　大伴　　潔

ジョイントセミナー1　5月30日(土)　13：30～14：30　（講義棟B棟 B202教室）

日常生活のなかで食べる機能を認識する

石田 瞭　東京歯科大学 摂食嚥下リハビリテーション研究室

ジョイントセミナー2　5月31日(日)　9：30～10：30　（講義棟B棟 B202教室）

補聴器フィッティングのピットフォール
～規定選択法と実耳測定、そして聴覚リハビリテーションの実際～

中川 雅文　国際医療福祉大学医学部 教授（耳鼻咽喉科学）

モーニングセミナー1　5月31日(日)　8：30～9：20　（講義棟B棟 B204教室）

司会：市川 智継（香川県立中央病院）

高次脳機能障害をみる視点

大槻 美佳　北海道大学大学院保健科学研究院 准教授

モーニングセミナー2　5月31日(日)　8：30～9：20　（講義棟B棟 B201教室）

司会：小林 宏明（金沢大学人間社会研究域学校教育系）

いまさら聞けない吃音臨床の基礎

川合 紀宗　広島大学学術院（大学院人間社会科学研究科）教授、
同研究科附属特別支援教育実践センター長

モーニングセミナー3　5月31日(日)　8：30～9：20　（講義棟B棟 B203教室）

司会：加藤 哲則（愛媛大学教育学部）

学習障害の基礎から応用
―評価の視点と特性に合わせた支援―

奥村 智人　大阪医科大学LDセンター 技術職員

ランチョンセミナー1　5月30日(土)　12：00～12：50　（講義棟B棟 B204教室）

司会：荻布 優子（奈良学園大学人間教育学部）

〈S-S法〉とは
―重度難聴重複例への取り組みを振り返り―

東川 健　横浜市西部地域療育センター 診療課

ランチョンセミナー2　5月30日(土)　12：00～12：50　（講義棟B棟 B201教室）

司会：藤原 加奈江（東北文化学園大学医療福祉学部）

学齢期児童の言語機能評価の在り方
―個別指導計画や個別教育支援計画に活用するために―

柴 玲子　社会福祉法人 日本心身障害児協会 島田療育センターはちおうじ
リハビリテーション科 言語聴覚士

ランチョンセミナー3　5月30日(土)　12：00～12：50　（講義棟B棟 B203教室）

司会：高卓 輝（東北文化学園大学医療福祉学部）

APDとDead Region
聴力検査異常なしは本当に問題ないと言ってよいのか

中川 雅文　国際医療福祉大学医学部 教授、
国際医療福祉大学病院 耳鼻咽喉科部長

ランチョンセミナー4　5月31日(日)　12：00～12：50　（講義棟B棟 B204教室）

司会：片桐 正敏（北海道教育大学旭川校）

子どもの語用能力を測る：CCC-2子どものコミュニケーション・チェックリスト日本版の模擬実施と「ことばのつかいかたテスト」の紹介

大井 学　金沢大学子どものこころの発達研究センター 特任教授

ランチョンセミナー5　5月31日(日)　12：00～12：50　（講義棟B棟 B201教室）

司会：宮崎 光明（富山市立大久保小学校）

発達障害のある子どもの親に対するペアレントトレーニング ―スタートアップのための基礎講座―

井上 雅彦　鳥取大学医学系研究科 教授

ランチョンセミナー6　5月31日(日)　12：00～12：50　（講義棟B棟 B203教室）

司会：松本 恵美（東北大学大学院教育学研究科）

家族・保護者支援のための背景理解

神谷 哲司　東北大学大学院教育学研究科

一般演題（口頭発表）

第1日目　5月30日㊏

自閉症スペクトラム障害　9：20～10：40　（講義棟C棟 C102教室）

座長：大井 学（金沢大学子どものこころの発達研究センター）
西野 将太（株式会社 L- はぴねす）

1O-01　自閉スペクトラム症幼児における聴覚誘発磁場と言語能力

金沢大学 人間社会研究域 学校教育系　吉村　優子

1O-02　絵本の会話と文
―自閉症の子の会話を指導するための理論的考察3

NPO法人コミュニケーション・アシスト・ネットワーク
ことばの相談室ひなたぼっこ　山本　正志

1O-03　絵本の会話化とごっこ遊びの積み上げ

NPO法人コミュニケーション・アシスト・ネットワーク
ことばの相談室ひなたぼっこ　山本　正志

1O-04　自閉スペクトラム症幼児の「お話作り」における発話連鎖の特徴
―定型発達幼児との比較―

東京学芸大学連合学校 教育学研究科　溝江　唯

1O-05　会話の切り出しが難しいASD児1例のコミュニケーション能力の検討

国際医療福祉大学 言語聴覚学科　佐藤　妙子

1O-06　自閉症スペクトラム指数（AQ）が高い成人ほど語用障害と
意味障害に対する認容性が高い

金沢大学子 どものこころの発達研究センター　大井　学

1O-07　ナラティヴ・アプローチによる対人関係支援
―「秘密いじめ対策隊」の実践を通して―

茨城県日立市立大みか小学校　鈴木ゆかり

1O-08　PEERSプログラムにおける思春期のASD児童生徒の自己理解

金沢大学 子どものこころの発達研究センター　田中　早苗

乳幼児検査　11：00～11：40　（講義棟 C 棟 C102 教室）

座長：松﨑　泰（東北大学加齢医学研究所）

1O-09　親の敏感性や語りかけと子の談話特徴の関係

熊本保健科学大学　井崎　基博

1O-10　母子相互作用場面における乳児の発声行動の分析

国立障害者リハビリテーションセンター病院
リハビリテーション部 言語聴覚療法　成田あゆみ

1O-11　育児未経験者の対乳児発話時の脳活動：fNIRS による検討

東北福祉大学大学院 教育学研究科　庭野賀津子

1O-12　トイトーク（Toy Talk）を用いた保護者指導による早期文法発達支援の試み

埼玉県立小児医療センター 保健発達部　遠藤　俊介

検査・評価　11：00～11：40　（講義棟 C 棟 C201 教室）

座長：野口　和人（東北大学大学院教育学研究科）

1O-13　言語発達臨床対象児における WPPSI-Ⅲと KABC-Ⅱの関連（1）
―5歳児集積データの統計分析から―

医療法人のうの小児科医院 発達支援センター「青い空」　西森　有紗

1O-14　言語発達臨床対象児における WPPSI-Ⅲと KABC-Ⅱの関連（2）
―W；「言語理解」と K；「語彙尺度」の分析から―

福山市立大学 教育学部 児童教育学科　伊澤　幸洋

1O-15　ブラジルにルーツのある幼児の Conceptual Vocabulary 評価の試み

共立女子大学 家政学部 児童学科　権藤　桂子

1O-16　邦人健常高齢者における Comprehensive Aphasia Test および
Pyramids and Palm Trees Test の分析

県立広島大学 保健福祉学部 コミュニケーション障害学科　津田　哲也

症例・指導　13：30～14：10　（講義棟 C 棟 C102 教室）

座長：藤野 博（東京学芸大学教職大学院）

1O-17　超低出生体重児への言語指導及び学習支援に関して
～訪問リハビリテーションによる実践～

あいりす訪問看護ステーション　木下　亜紀

1O-18　ナラティブを用いた学習言語指導の試み

新潟大学 教育学部　入山満恵子

1O-19　絵日記にみる選択性緘黙児へのコミュニケーション支援の検討
～話せる場面作りと ICT 支援ツール活用の試み～

つくば市立竹園西小学校　奥沢　忍

1O-20　重度重複障害のある幼児への音楽を介したコミュニケーション支援

昭和音楽大学　白川ゆう子

高次脳機能障害・症例　13：30～14：20　（講義棟 C 棟 C201 教室）

座長：時田 春樹（川崎医療福祉大学リハビリテーション学部）
古西 隆之（岡山大学病院総合リハビリテーション部）

1O-21　高次脳機能障害者の職場の人的環境を対象とする
コミュニケーションパートナートレーニング

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構 障害者職業総合センター　土屋　知子

1O-22　相貌失認を呈した一例の顔認知
～視線計測を用いた検討～

熊本保健科学大学 保健科学部 リハビリテーション学科 言語聴覚学専攻　畑添　涼

1O-23　課題・目標の明確化と行動結果の振り返りによって、
不安が軽減し、前向きな言動が増加した２事例について

県立広島大学 保健福祉学部 コミュニケーション障害学科　中村　文

1O-24　言語コミュニケーションが困難な人との
コミュニケーション機器利用にみる五十音の呪縛

一般社団法人結ライフコミュニケーション研究所　高橋　宜盟

1O-25　地域生活におけるコミュニケーション支援の一例
～地域でのチーム連携～

イーハトーブびいんぐ　松田　輝美

社会支援　15：00～16：00　（講義棟 C 棟 C102 教室）

座長：田中 早苗（金沢大学子どものこころの発達研究センター）

1O-26　乳幼児健康診査への言語聴覚士の関わり

国際医療福祉大学 成田保健医療学部 言語聴覚学科　岩崎　淳也

1O-27　地域支援における間接支援の視点による取り組みについて

岩手県立療育センター 相談支援部　矢吹　裕哉

1O-28　言語聴覚士による特別支援学級巡回指導の取り組み

海老名市教育支援センター　佐々木ゆり

1O-29　発達障害圏にある児童生徒の学校生活に関する調査結果報告

名古屋芸術大学 人間発達学研究科　中嶋　理香

1O-30　特別支援学校教員の場面緘黙のある児童生徒への
指導支援に関する実態調査

金沢大学 人間社会研究域 学校教育系　小林　宏明

1O-31　災害情報に特化した JIS 絵記号シンボルと文章の開発および評価

株式会社オフィス・スローライフ　林　文博

聴覚・聴覚障害　15：00～16：10　（講義棟 C 棟 C201 教室）

座長：加藤 哲則（愛媛大学教育学部）
下澤 真紀（沖縄県立宮古病院）

1O-32　幼児期の聴覚障害児における最大文長の発達

東京都立大塚ろう学校 城東分教室　菅原　充範

1O-33　自閉症スペクトラム障害を伴う難聴児は相手の身振りと表情を
どう合致させるのか

福岡国際医療福祉大学 言語聴覚専攻科　平島ユイ子

1O-34　コミュニケーション能力が向上した両側人工内耳装用 ASD 児症例

川崎医療福祉大学 リハビリテーション学部 言語聴覚療法学科　川上　紀子

1O-35　青年期にある人工内耳装用者の人工内耳と聴覚障害への認識

在宅ケアサポートみちくさ きこえとことばの相談室　石田　彩

1O-36　音場の調整を行うことでの聴覚的検査 / 課題結果の影響について

早良病院　百武　理子

1O-37　語音聴取アプリを利用した騒音下における年代別聴力の実態

広島大学宇宙再生医療センター 聴覚リハビリテーション研究グループ　中石真一路

1O-38　認知機能低下を認める患者とのコミュニケーションの在り方に関する考察

国際医療福祉大学病院 リハビリテーション室　塩水麻紀子

第2日目　5月31日(日)

言語発達・学習障害　9：30～10：40　（講義棟C棟 C102教室）

座長：原 惠子（上智大学言語科学研究科）
樋口 一宗（東北福祉大学教育学部教育学科）

2O-01　発達性ディスレクシアの有無による語彙力や学習の基礎的技能の検討
～日本版KABC-Ⅱ「習得検査」を用いて～

東北大学大学院 教育学研究科　水田めくみ

2O-02　小学6年時と小学1年時の読み能力の関係
―小学校における6年間の縦断調査から―

上智大学 言語科学研究科 言語聴覚研究コース　原　惠子

2O-03　学童期の語彙獲得に関連する要因：語の意味推測からの検討

国際医療福祉大学大学院　舟守千瑞子

2O-04　ひらがな読み困難が情緒面の問題としても顕在化していた
事例の指導経過

奈良学園大学 人間教育学部　荻布　優子

2O-05　漢字と英単語の書字に困難を示す二言語使用者の
誤りの特徴についての一考察

北里大学大学院 医療系研究科　上岡　清乃

2O-06　先天的な視覚障害が語彙形成に与える影響
―感覚情報を意味する形容詞とオノマトペに焦点を当てて―

上智大学大学院 言語科学研究科 言語学専攻 言語聴覚研究コース　椎原　可菜

2O-07　配列画説明とストーリー作成の発話の特徴
―状況理解・構成力との関連から―

東京学芸大学 教育学研究科　佐藤　佳那

失語症　9：30～10：40　（講義棟 C 棟 C201 教室）

座長：中村　光（岡山県立大学保健福祉学部保健福祉学科）

2O-08　失語のある人の談話評価における日本語版 Main Concept Analysis の有用性の検討

日本医科大学付属病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科　矢頭　瞳

2O-09　失語症総合検査 JCAT の意味記憶課題と再認記憶課題の作成過程について

上智大学 言語科学研究科 言語聴覚研究コース　吉畑　博代

2O-10　重度の失語症及び非言語的 communication 障害も併発した急性期脳梗塞患者の脳画像からの症状検討

公立学校共済組合 九州中央病院 リハビリ技術科　梶原　康暉

2O-11　失語症者の動詞の表出における項の移動と項の数の影響

上智大学大学院 言語科学研究科 言語学専攻 言語聴覚研究コース　髙津　亘広

2O-12　失語症者におけるタイピングの誤りについて
―ローマ字タイピングを行う症例を通して―

愛知淑徳大学 健康医療科学部 医療貢献学科 言語聴覚学専攻　桐木　文咲

2O-13　複数の伝達手段を利用することでコミュニケーション能力が向上した重度失語症の一例

東京湾岸リハビリテーション病院 リハビリテーション部　大平　佳奈

2O-14　失語症者の動詞習得法の開発　第1報
～意味用法の視点からの評価と訓練～

熊本保健科学大学　濵田　雄仁

構音障害　11：10～11：40　（講義棟 C 棟 C102 教室）

座長：原 由紀（北里大学医療衛生学部）

2O-15　カスタマイズによりペーシングボードの導入が可能になった運動障害性構音障害患者

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター病院
身体リハビリテーション科　織田　千尋

2O-16　職場場面に限局した症状が発声全般に現れるようになった機能性発声障害例の音声治療の検討

北里大学 医療衛生学部 リハビリテーション学科 言語聴覚療法学専攻　村上　健

2O-17　機能性構音障害における /k/ の置換に関する検討

昭和大学藤が丘リハビリテーション病院　堤　智可

青年期・支援　11：10～11：40　（講義棟 C 棟 C201 教室）

座長：前田 駿太（東北大学大学院教育学研究科）

2O-18　不安階層表を用いたエクスポージャーにより顕著な症状の改善を示した青年期の場面緘黙の事例

長野大学 社会福祉学部　高木　潤野

2O-19　医療系専門職養成課程に在籍する自閉スペクトラム症の大学生の臨床実習前後の変化

新潟医療福祉大学 リハビリテーション学部 言語聴覚学科　石本　豪

2O-20　言語聴覚士の臨床実習において ADHD 当事者が体験した学びの特徴
―対話的協働を通した合理的配慮論の再考―

関西福祉科学大学 保健医療学部　工藤　芳幸

流暢性障害　14：30～15：50　（講義棟 C 棟 C102 教室）

座長：川合 紀宗（広島大学学術院（大学院人間社会科学研究科））
宮本 昌子（筑波大学人間系）

2O-21　吃音のある幼児の流暢性と発話長に関する予備的調査

国立障害者リハビリテーションセンター　酒井奈緒美

2O-22　表出言語の遅れが著しかった児が示した吃音症状

東京医療学院大学 保健医療学部　青木さつき

2O-23　吃音は子音よりも母音で生じやすいのか
―学齢期吃音児の自由会話の分析―

福生市立福生第七小学校　高橋　三郎

2O-24　吃音に悩む中国人留学生への支援

近畿大学病院 リハビリテーション部　久保田　功

2O-25　吃音のある人の発話は統合的アプローチを３セッション実施後に
どのように変化するのか

北里大学 医療衛生学部　秦　若菜

2O-26　吃音および吃音に併存する問題が就労困難感におよぼす影響について

筑波大学大学院 人間総合科学研究科　飯村　大智

2O-27　吃音を肯定的に捉えられるようになるまでの過程に関する
成人吃音者を対象とした調査

聖隷クリストファー大学 リハビリテーション学部 言語聴覚学科　谷　哲夫

2O-28　早口言葉の言い誤りの要因に関する検討
―語彙レベルでの誤りに着目して―

愛知淑徳大学 健康医療科学部 医療貢献学科 言語聴覚学専攻　松浦　麻香

実 践 発 表

第1日目　5月30日㊏

実践発表1　11：00～11：50　（講義棟 B 棟 B200教室）

座長：吉畑 博代（上智大学言語科学研究科）
濱田 豊彦（東京学芸大学特別支援科学講座）

実践発表1-1　児童発達支援事業所における ASD 児の DQ 値変化
～ ABA による Low-Intensity 介入と親支援から～

児童発達支援事業所 ママとままま　林　文博

実践発表1-2　重症気管カニューレ患者に対する抜管のリハビリテーション

社会医療法人宏潤会 大同病院 リハビリテーション科　堀池　正太

実践発表2　11：00～11：50　（講義棟 C 棟 C200教室）

座長：片桐 正敏（北海道教育大学旭川校）
石田 瞭（東京歯科大学）

実践発表2-1　右大脳半球損傷者における無関心反応の研究

川崎医療福祉大学 リハビリテーション学部 言語聴覚療法学科　小浜　尚也

実践発表2-2　社交場面で生じる機能性発声障害に対する治療

東京慈恵会医科大学附属病院 耳鼻咽喉・頭頸部外科　近藤由以子

基 調 講 演

認知症を支援する：
認知機能を支えるコミュニケーション

長田 乾

横浜総合病院 臨床研究センター

司　会：**神谷 哲司**（東北大学大学院教育学研究科）

5月30日㊏ 9：20～10：50

（講義棟B棟 B200教室）

演者 プロフィール

長田 乾（ながた けん）

1978年3月　弘前大学医学部 卒業
1978年6月　財団法人脳血管研究所美原記念病院 神経内科 研修医
1979年3月　財団法人脳血管研究所美原記念病院 神経内科 研究員
1983年5月　コロラド大学医学部保健科学センター 神経内科（米国）研究員
1984年9月　秋田県立脳血管研究センター 神経内科学研究部 研究員
2002年4月　秋田県立脳血管研究センター 神経内科学研究部 部長
2016年4月　医療法人社団緑成会 横浜総合病院臨床研究センター
センター長

所属学会：

日本認知神経科学会（理事・編集委員）
日本脳卒中学会（特別会員）
日本臨床神経生理学会（名誉会員）
日本認知症学会（評議員・編集委員）
日本神経心理学会（評議員）
日本脳循環代謝学会（評議員）
日本薬物脳波学会（理事・監事）
日本脳電磁図トポグラフィ研究会（理事長）
日本高次脳障害学会（評議員）
日本脳血管・認知症学会（理事）
脳損傷者ケアリングコミュニティ学会（理事）
国際脳電磁図トポグラフィ学会（理事）
アジア認知症学会（理事）
米国心臓協会脳卒中部門（評議員）

認定医・専門医：

日本神経学会
日本認知症学会
日本脳卒中学会
日本内科学会
日本臨床神経生理学会

その他の活動：

秋田大学 客員教授
東京都立大学非常勤講師
杏林大学 非常勤講師

賞　罰：

1989年1月　日本心臓財団（日本脳卒中学会）草野賞受賞
2016年10月　日本臨床神経生理学会 学会賞（島薗賞）受賞

専門領域：

神経内科：脳卒中、認知症、画像診断

認知症を支援する：認知機能を支えるコミュニケーション

長田 乾
横浜総合病院 臨床研究センター

われわれの大脳皮質はさまざまな小領域に分かれて機能を分担し、互いに神経線維でつながっており、100兆以上のシナプス結合が存在し複雑な「脳内ネットワーク」を構成しています。注意、記憶、実行機能、言語機能、視空間認知などの認知機能は、この領域間のコミュニケーションに支えられています。加齢や脳疾患などで脳の領域間のコミュニケーションが変化すると、領域間で情報が正常に伝達されず認知機能が低下します。機能的MRIを使った研究などから、認知機能の保たれた高齢者は、種々の課題に対して脳内ネットワーク内のより多くの脳領域を賦活させて機能の低下を補う代償機転が働くことが示唆されています。また、脳損傷からの回復過程でも同様の代償機転が働くことが報告されており、損傷を受けた脳部位の機能を補うために、脳内ネットワークで結ばれた他の脳領域が動員されて、脳全体として機能を代償すると考えられています。すなわち、脳領域間のコミュニケーションが効率的に作動することが、加齢による認知機能の衰えや脳損傷の代償機転の鍵になると考えられています。一方、われわれは家族、友人・知人、近隣の住人、職場、社会参加などの社会とのさまざまなコミュニケーション、すなわち「社会ネットワーク」の中で生活しており、良好な社会ネットワークがあると認知機能は低下し難いと考えられています。独居や近隣や親戚との交流が少ない社会的孤立は、社会的フレイルとも言われ、老年期の認知機能低下の危険因子と見做されています。一方、趣味やボランティアなどのグループへの参加割合が高いほど、鬱になり難く、スポーツやボランティアへの参加割合が高い地域ほど、認知症を発症するリスクが低いことが明らかにされています。さらに最近発表されたデータでは、会合やイベントに単に参加するだけでなく、組織の世話役などの役割を担って、より積極的に参加することが、認知症リスクをさらに下げることが明らかにされました。男性の場合は、町内会・自治体、老人クラブ、消防団などの地域組織活動と、政治団体の会、業界団体・同業団体、住民運動、消費者運動などの政治経済活動が、認知機能低下を防ぐ効果が大きく、女性の場合は、ボランティア活動への参加が認知活動の低下を防ぐ可能性が高いことが分かりました。従って、人と人とのコミュニケーション、すなわち社会ネットワークがわれわれの認知機能を支えていると言えます。脳損傷からの回復過程において「レジリアンス（resilience）」の重要性が注目されています。レジリアンスとは、外力による凹みを跳ね返す復元力、すなわち極めて不利な状況に陥ってもうまく乗り切る能力を意味します。脳損傷からの機能回復には、脳内ネットワークが有効に作動して損傷を免れた脳部位が機能を代償することと、残存能力を駆使した新たな方略を身に付けること、諦めない強い意志や向上心を持つことなどの重要性が論じられています。毎日漫然と過ごすのではなく、強い意志を持って訓練や練習を重ねるためには、家族の支えや周囲の理解・支援、さらに社会ネットワークとの繋がりが必要なことは言うまでもありません。すなわちレジリアンスもこうした周囲とのコミュニケーションに支えられてこそ威力を発揮すると解釈することもできます。

一 般 演 題

（口頭発表）

1O

第1日目　5月30日土

講義棟 C 棟 C102 教室

講義棟 C 棟 C201 教室

1O-01

自閉スペクトラム症幼児における聴覚誘発磁場と言語能力

吉村 優子
金沢大学 人間社会研究域 学校教育系

自閉スペクトラム症（以下、ASD）においては、人の声や音に対する脳反応が定型発達者（児）と異なることが報告されている。また先行研究では、音や人間の声に対する脳の反応と言語能力との関係が報告されている。しかしながら、幼児期の ASD 児の脳機能と言語発達の関係については未だ不明な点も多い。

本研究では、幼児を対象に音によって引き起こされる脳反応を脳磁図（MEG）を使用して捉え、言語能力との関係を調べることを目的とした。

定型発達児（以下、TD 児）35 名（70.8 ± 4.0 か月）と ASD 児 38 名（73.4 ± 10.4 か月）を対象に、2 種類の純音（標準刺激 523Hz と逸脱刺激 1,046Hz）によって誘発される脳反応を幼児用 MEG システムを使用して記録した。標準刺激によって誘発される脳反応（P1m、N1m、N2m）を本分析で使用した。P1m、N1m、および N2m の強度と潜時について、TD 児と ASD 児で比較した。さらに、脳反応（P1m および N2m）の強度と潜時について、言語能力との関係を各群で調査した。

分析の結果、TD 児と ASD 児の比較において、両半球で脳反応に有意な差は認められなかった。脳反応と言語能力の関係では、TD 児において、左半球の N2m 強度と PVT-R の標準スコアの間に有意な正の相関があり（N=33 r=0.444 P=0.010）、右半球の N2m 潜時と PVT-R の標準スコアには、有意な負の相関が認められた（N=34 r=-0.412 P=0.016）。ASD 児は、ASD の脳反応と言語能力の間に有意な相関は認められなかった。

本結果は、純音によって引き起こされる脳反応（P1m、N1m、N2m）について、5 歳から 8 歳の TD 児と ASD 児の間には有意な差はなかったことを示した。TD の子供では、N2m の潜時が短く、強度が高いことが言語理解能力の高さと相関していた。一方、ASD 児には同様の関係は見られず、幼児期から学齢期の脳神経細胞の成熟の仕方において、違いがあることが示唆される。

1O-02

絵本の会話と文
―自閉症の子の会話を指導するための理論的考察 3

山本 正志
NPO 法人コミュニケーション・アシスト・ネットワーク
ことばの相談室ひなたぼっこ

【目的】 自閉症の幼児に絵本の読み聞かせをしていると、地の文と会話の台詞を区別せず、まるまる覚え一続きに唱えてしまうことがある。自閉症の子は登場人物・動物が台詞を交互に交わしていることがうまく認識できない。その要因と指導法を考える。

【方法】 二つの観点から理論的に考察する。

【結果】

1. 絵本は絵に描かれた登場人物・動物がやり取りし場面が変化して話が進み、補助的に地の文で説明する。ところが地の文は会話体の台詞ではなく、文章で叙述している絵本が大多数である。その例としてよく劇遊びに使われる『おおきなかぶ』を見ると、〔いぬは ねこを よんできました〕と叙述の文型の繰り返しである。さらに登場人物の台詞は（マンガの吹き出しとは違って）地の文に埋め込まれることが多いため、話者が誰か特定しにくい。こうした絵本の構成により、もともと会話の機能が弱い自閉症の子は、地の文と台詞を区別しにくい。
2. そもそも文と台詞は、違う。

- 『おおきなかぶ』の文「○は △を よんできました」の対人機能を、登場人物の視線や動作を参考に推測すると、呼んできたことを待っている人に報告しているのが 3 回で、相手にお願いしているのが 1 回だった。文が同じ文型でも、違う対人機能を表現することがある。
- 台詞主体の絵本もある。その例『もりのおふろ』西村敏雄で繰返される台詞が、a, ぞうさん、わたしのせなかをあらってもらえませんか。だが、a, から丁寧表現を除くと b, になり、それに対応する構文を作ると c, になる。b, ぞうさん、わたしのせなかを あらって。c, ぞうさんがらいおんのせなかを あらう。しかし、a, はまだぞうがらいおんの背中を洗っていないのであり、c, とは対応しない。そこで c, を訂正すると d, ぞうさんに らいおんは せなかを あらってほしい。d, が a, に対応する文である。

  文末のモダリティ表現が重要で、それに伴い格助詞も変化する。こんな変換は幼児には難しい。

【考察】 略

1O-03

絵本の会話化とごっこ遊びの積み上げ

山本 正志、山本 博香、増山 沙也子
NPO 法人コミュニケーション・アシスト・ネットワーク
ことばの相談室ひなたぼっこ

【初めに】遅延反響言語が見られる自閉症の子に絵本の読み聞かせをしていると、会話の台詞と地の文を区別せず、まるまる覚えて一続きに唱えてしまうことがある。自閉症の子は登場人物・動物が台詞を交互に交わしていることがなかなか認識できない。そこで付箋を吹き出しのように使い、地の文と台詞を区別した。また自由遊びをする時に、意図してごっこ遊びを組み込んだ。

【結果】

Ⅰ. 絵本の会話化

①**付箋の活用**：幼児向け絵本で台詞の形で書かれているのは少数である。そこで台詞を付箋に書き写しマンガの吹き出しのように会話者の所に貼り付ける。読み聞かせ時に付箋を開閉して、どの人物の台詞なのか明示した。

②**劇遊び**：絵本の登場人物になって台詞を交わす簡単な劇遊びをする。登場人物の絵カードを作り、それを本人、保護者等に渡しどの役割をするか明示した。また情景の一部をコピーして机上に置き、場面とした。

Ⅱ. ごっこ遊び

- （ごっこのバリエーション）ミニカー、レール、動物フィギュア、ままごと
- （段階）

①最初は玩具を物として扱い、人とのやり取りがない（フィギュアを一列に並べる、床やレールの上で車を黙々と動かす、大根等を次々切る）。

②指導者が少し言葉で意味づけする（「あっ火事です、消防車来てください」「お客さんです、乗せてください」「塩も振って、美味しくしよう」「パンダお母さん、待って待って」）。

③いろいろな場面やルールを設定する（十字路や店や信号を配置し街を作る。駅や踏切や、サファリや水飲み場を置く）。ルールを守るように指導者と会話する。またそれぞれ別の遊びをしていた子が相互に関わるようにする（ミニカー遊びの子に「お弁当買いに行こう」と、ままごとの所に誘う）。

④子ども同士が／オベントウ　クダサイ／等とやり取りするように誘導する。

【考察】自閉症の子には、単語や文やお話しを教えることで終わらず、それを会話で使う場面を作ることが大事だ。

1O-04

自閉スペクトラム症幼児の「お話作り」における発話連鎖の特徴
―定型発達幼児との比較―

溝江 唯[1)]、大伴 潔[2)]
1）東京学芸大学連合学校 教育学研究科
2）東京学芸大学

【目的】自閉スペクトラム症（以下 ASD）児者のフィクショナルナラティブ（以下 FN）は統語的側面や語用論的側面の課題が指摘されているが、その発達過程については明らかにされていない。また FN の評価に使用される課題は図版を見て幼児の発話を促すものが多く、日常場面との間に違いがある。そこで本研究では3歳台の ASD 幼児を対象に自由な「お話し作り」における発話の連鎖の特徴を定型発達（以下 TD）幼児との比較により検討した。

【方法】

対象：医療機関で ASD の診断を受けた36か月～44か月の ASD 幼児7名（新版 K 式発達検査の DA36か月～50か月、DQ84～110）と36か月～45か月の TD 幼児7名を対象とした。ASD 幼児の DA と TD 幼児の CA、LC スケールの LC 年齢に有意な差はなかった。

「お話作り」の課題：実験実施者が人形を操作しながら対象児に話を聞かせた。話はトラブル場面（例：出かける途中で車が壊れた）で終わるようにし、対象児に話の続きを作るよう促した。課題は2種類実施した。

分析方法：量的分析では発話数、平均語連鎖数、語彙頻度、異なり語彙数を算出した。質的分析では、一つのまとまりを示す発話連鎖のユニット数、ユニット内の平均発話連鎖数、前の発話を修飾する発話の数、前の発話を繰り返す発話の数、話の転換を示す転換数、「お話作り」とは無関連の発話である逸脱数を算出した。Mann-Whitney の U 検定を行い両群を比較した。

【結果と考察】質的分析においては ASD 幼児は TD 幼児よりも、ユニット数、転換数、逸脱数が有意に多かった（$p<.05$）。ASD 幼児の発話の連鎖における特徴として、話題の転換や逸脱が多くまとまりのある発話の連鎖が少ないことが示唆された。一方量的分析においては、両群で有意な差は認められず、ASD 幼児の発話の特徴は量的分析のみでは不十分であり、質的検討が必要であると考えられた。今後はよりまとまりのある発話表現への発達過程や、FN の土台となる認知機能についても検討していく。

第46回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
準 備 委 員

会　　長	川﨑　聡大	東北大学
副 会 長	藤原加奈江	東北文化学園大学
事務局長	松﨑　　泰	東北大学
準備委員	荻布　優子	奈良学園大学
	加藤　哲則	愛媛大学
	神谷　哲司	東北大学
	川田　　拓	東北大学
	古西　隆之	岡山大学病院
	下澤　真紀	沖縄県立宮古病院
	二本松直人	東北大学
	野口　和人	東北大学
	樋口　一宗	東北福祉大学
	前田　駿太	東北大学
	松本　恵美	東北大学
	松好　伸一	石巻専修大学
	三田地真実	星槎大学
	三好　敏之	尚絅学院大学人間心理学科
	村上　　健	北里大学

（敬称略、五十音順、2020年3月時点）

第46回 日本コミュニケーション障害学会学術講演会
予　稿　集

2020年4月17日発行

発行者：第46回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 会長
川﨑 聡大

事務局：〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1
東北大学大学院教育学研究科 川﨑研究室内
事務局長：松﨑 泰（東北大学加齢医学研究所）
E-mail：acd46annual.meeting@sed.tohoku.ac.jp

出　版：株式会社セカンド
〒862-0950 熊本市中央区水前寺4-39-11 ヤマウチビル1F
TEL：096-382-7793　FAX：096-386-2025
https://secand.jp/

第46回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 事務局

事務局長：松 﨑　泰（東北大学加齢医学研究所）

東北大学大学院教育学研究科　川﨑研究室内

〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1

E-mail: acd46annual.meeting@sed.tohoku.ac.jp